

好きだと言って、ご主人様

Saaya & Seiichiro

加地アヤメ

Ayame Kaji

eternity



エタニティ文庫

目次

好きだと言って、ご主人様

5

愛していると言って、旦那様

319

書き下ろし番外編

謎多き井筒さん

339

好きだと言って、
ご主人様

第一章 はじめまして、ご主人様

水曜日の朝八時三十分。勤務先の工場に到着した私は歩みを止めた。

なぜか従業員通用口の前に、普段では考えられない程の人が集まっている。

「なに……?」

不思議に思いながら人波をすり抜けドアに近づくと、一枚の紙が貼りつけられていた。そこに書かれていた見出しを見た瞬間、心臓がどくん、と大きく脈打った。

「はっ?」

『倒産による従業員解雇のお知らせ』

——なにこれ。

どういうこと、どういうこと、どういうこと……?」

混乱しつつ周囲を窺うと、厳しい顔で話し込む従業員たちの姿があちこちに見える。

中には幹部社員に詰め寄り、怒号を浴びせる男性社員もいた。それを見つめているうちに、私の脳もようやく状況を呑み込み始める。

倒産、従業員解雇……!」

自分の身に起こった状況を理解して、サーツと血の気が引いていく。そんな私の隣に顔見知りの従業員の女性がやってきた。

「おはよう、寛さん。もう、びっくりよね……業績が良くないっていう噂は流れてたけど、まさかいきなりこんなことになるなんて。それに社長が有り金持って逃げたらしく、今月のお給料出ないかもしれないですってよ。ありえなくない?」

「えっ、お給料が出ない!」

呆然としていた私だが、さすがにこれは聞き捨てならない。

「ほ、本当ですか!? それは困ります!!」

食いつかんばかりの勢いで、隣にいる女性に聞き返した。

「私だって困るわよ。なんか、従業員で集団訴訟起こそうって話が出てるみたいだから、少しでも保証してもらえんといいけど……」

やるせなさそうにそう言っ、女性が重いため息をつく。

倒産だけでもショックなのに、さらに追い打ちをかける事実には完全に言葉を失った。

——寛沙彩^{さあや}、二十歳。天涯孤独の身の上ながら、なんとか正社員として働き自活していた私は、本日のいきなり職を失ってしまった。

ひとまず従業員は自宅待機ということになり、私は自分のアパートに戻ってきた。そうして真っ先にしたことは、今月の経費の計算だ。何度も何度も収支を確かめ電卓を叩くけれど、出る数字は変わらない。

「あーっ!! どうやっても足りないんですけど……!!」

今月の給料が支払われないとなると、今の預金残高では月末の引き落としには到底足りない。それに倒産による解雇で支払われる失業手当も、月末には間に合わない。私は頭を抱え、部屋の中央に置かれた小さなテーブルに突っ伏した。

「どうしよう……アパートの家賃が払えない……」

月末までまだ日があるとはいえ、もう一つのバイト代の給料を入れても、家賃は払えそうにない。

「となるとなにか、日払いのバイトを探さないとダメか……」

時計を見て時間を確認すると、六時からのバイトまではまだ時間がある。

ちよつと休憩してからコンビニで求人情報誌をもらってこよう。そう思いながら立ち上がると、タンスの上にある両親の遺影が目に入った。

ここ二年の間で立て続けに両親が他界。頼れる親類もない私は、小さなアパートで質素な生活を送っていた。

工場での仕事と夜間の清掃バイトで細々と暮らしていたのに、まさかこんなことになるなんて。

ふらふらと両親の位牌の前まで移動し、手を合わせた。

「お父さん、お母さん。ピンチですが、心配しないでください……」

私は、そのまま畳んであった布団に倒れ込む。

毎日、真面目に慎ましく暮らしていただけなのに……。突然の不運に落ち込みながら、私はそつと目を閉じた。

すると猛烈な睡魔に襲われて、私はそのまま眠り込んでしまう。

自分で思うより疲労が溜まっていたのだろうか。少しだけ休むつもりが目を覚ますと、次のバイトに出掛ける時間が迫っていた。

「いけない……歩いていくつもりだから……そろそろ出ないと遅刻しちゃう!」

慌てて体を起こし身支度を整えた私は、夜の清掃バイトに向かうため部屋を飛び出した。

今から数時間後、自分の人生が大きく変わることになるなんて、この時の私は知る由もなかった。

バイト先はアパートから電車で二駅先。しかし、今の私は少しでも節約しなければな

らない身だ。普段は電車で行くところを、徒歩で向かう。できる限り出費を抑えないと、食べることすらままならなくなってしまう。

バイト先がそれ程遠方じゃなくてよかったと思いつながら、私は今後のことについて考える。

まずはバイト先のマネージャーに給料の前借りができないか相談してみよう。もしくは、今までは週三で入れていたバイトを、もっと増やしてもらえるように頼んでみるのか……

それがだめだったら、急いでもう一個バイトを探さないといけない。今月末の支払いができなければ、失業した上、路頭に迷うことになってしまう。

早足で三十分程歩くと、大きなビルが立ち並ぶオフィス街が見えてきた。そこからさらに歩くこと二十分。一際高くそびえ立つビルに到着した。

ここは、神野ホールディングス株式会社の本社ビル。神野グループと呼ばれる日本でも有数の大企業の持ちビルで、中にはグループ傘下の企業がいくつも入っている。

私のバイト先である清掃会社も神野グループに属する会社の一つだ。たまたま求人情報誌で見つけたのだが、同じ職種の中でも時給が高く希望者が多かったので、採用されたのはラッキーだった。

ビルの裏口にある社員専用通用口から中に入り、バイト先の「ジェイ・ビルディングサービズ株式会社」の事務所に向かう。
ジェイ・ビルディングサービズは、このビルの清掃を一手に請け負っている会社だ。ビル内の日常清掃と、定期的に行われるフロアのワックスがけや窓の清掃、カーペットのクリーニングなどなど。数名の社員と私のようなアルバイトスタッフが、各々割り当てられた場所を清掃している。

事務所に到着した私は、タイムカードを押しつつマネージャーの姿を探す。しかし、あいにく不在のようで、仕方なく給料前借りの件は婦りに相談することにした。
ロッカールームで腰まで伸びた長い髪を一つに結び、会社指定のユニフォームに着替える。準備ができたならシフト表を確認し、掃除用具の入ったワゴンを押して担当の場所へ向かった。

夕方六時を過ぎた時間。ビル内で働いているサラリーマンやOLが、続々と帰宅していく。いつもなら「お仕事お疲れ様です」なんて心の中で思っていたけど、さすがに今日はそんな風には考えられない。

「仕事……いいな……」

仕事を失ったばかりの私には、彼らが生き活きと眩しく映る。人を羨んだり、卑屈になつたりはしたくないけど、どうしてもそんな気持ち湧き上がってきてしまう。

私は軽く頬を叩き、自分に気合を入れた。落ち込んでいても仕方がない。今は目の前

の仕事だ。

「さ、始めよ」

気持ちを切り替えて、私はワゴンの中からトイレ掃除グッズ一式を取り出した。今日はトイレと水回りの掃除、それとフロアのモップがけ。これを自分の担当フロアで行うのだ。

黙々と手を動かしている間は、仕事のことも家賃のことも考えずに済む。気がつくとき、あつという間に数時間が過ぎていた。

担当箇所の掃除を全て終えた私は、チェック表にサインをして事務所に戻る。すると、清掃リーダーの三井さんが困り顔で私に近づいてきた。

「寛さん、終わったばかりのところ申し訳ないんだけど、急な依頼があつて、今から役員フロアに行ってくれないかしら？」

「役員フロア……ですか」

このビルの最上部にある役員フロアは、神野グループのトップがいる重要セクションだ。普段はベテランスタッフが持ち回りで清掃を担当している。そんな場所に、バイトの私が行ってもいいのだろうか。

「あの、研修の時、役員フロアは担当が固定されていると伺ったのですが……」
私が尋ねると、三井さんは「それがね」と困ったように肩を竦めた。

「今日、役員フロアの清掃は不要と聞いていたから、担当スタッフが全員お休みなのよ。だけど、コーヒーをカーペットに零してしまつたから清掃に来てほしいって、さつき役員の方から連絡がきてね……。寛さん、この前の研修でコーヒーの染み抜きやり方一通り教わっていたわよね？ どうだろう、お願いできる？ 残業代出すから」

「残業代という言葉に反応し、私は即座に頷いた。」

「分かりました。私でよければぜひ！」

弾んだ声で返事をする、三井さんの顔に安堵の色が広がる。

「よかつたー！ じゃあ、先方にはあなたが行くことを伝えるわね」

三井さんはいそいそと先方に電話をかけ、私が行くことを伝え電話を切る。
「電話をかけてきた方が、エレベーターの前で待っていてくださるぞうよ。よろしくねー！」

「はい、分かりました」

事務所を出た私は、意気揚々とワゴンを押してエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターが最上階に近づくにつれて、私の背筋は自然と伸びる。接客は第一印象が重要。ましてここは、普段ベテランスタッフしか入れない重要セクションだ。

最上階に着き、静かにエレベーターの扉が開く。最初に目に飛び込んだものに、私は思わず息を呑んだ。エレベーターの前で私を待っていたのは、想像していた大企業

の役員——かっせ恰幅のいい年配の男性——ではなかった。
 仕立ての良さそうなダークスーツを身に纏まとい、長身で切れ長の目が印象的な若い男性。
 これまでの人生で見たことがない程のイケメンがそこにいた。

「……君がビルディングサービスの寛さん？」

穏やかに声を掛けられて、自分が仕事でここへ来たということ思い出す。

「あっ、はい！ 寛です！ 清掃をしに伺いました」

慌ててエレベーターから出て、背筋を伸ばして一礼する。すると目の前の男性が可笑おかしように口の端を上げた。

「元気がいいな。では早速頼む。こっちだ」

スーツの裾を翻ひるし、男性は足早にフロアの奥へと歩を進める。

現在の時刻は夜の九時過ぎ。周囲に人気はなく、フロアは閑散かんさんとしていた。

それにしても……と私は視線を前方に向ける。

私の前を颯爽さつそうと歩く男性は、かなり若い。年齢は私より上だと思うが、役員と言うには若すぎるように思う。

先程三井さんは、役員の方が電話をかけてきたって言っていたし、もしかしたらその人の秘書とかだろうか……

そんなことを考えながら彼のあとをついていく。男性は廊下の突き当たりにある役員室の大きなドアを開け、中に入るよう促うながしてきた。
 「どうぞ」

「し、失礼いたします」

一礼して中に入ると、二十畳はありそうな部屋の広さにまず驚く。部屋の中には重厚感のある革張りのソファとガラスのテーブルが置かれており、その奥に大きなデスクと座り心地のよさそうな椅子が見えた。壁面のニッチには色鮮やかで美しい陶器の壺が飾られている。

部屋の中をぐるりと見回し言葉失っていると、男性に声を掛けられた。

「お願いしたいのはそこだ。うっかりコーヒーの入ったカップを手で払い落としてしまつてね」

男性に言われた辺りを見ると、カーペットに大きな茶色の染みが広がっている。

「分かりました。それでは早速、作業に入らせていただきます」

私はワゴンの中から染み抜きセットを取り出した。

まずは乾いた布でカーペットに広がったコーヒーを吸い上げていく。ポイントは染みをこれ以上広げないように、外側から内側に向かって布を押し当てることだ。大体吸い上げたところで、専用の染み抜き剤をカーペットにスプレーし、汚れを浮かせる。そこへ乾いた布を被せ、上から専用のブラシでトントン叩き、布に汚れを移していく。この

作業を地道に繰り返しているうちに、カーペットの染みはほとんど目立たなくなつた。

「……ほう。綺麗になるものだな」

すぐ側から興味深そうな声が聞こえ、驚いて声のした方を見る。

私が作業を始めた時、男性はデスクでパソコンと向き合っていた。それがいつの間にか、私のすぐ横に立ち手元を覗き込んでいる。

「あの、染みは取れたので、このあとすぎ作業をして、完了です」

男性にそう説明し、私は染みがあったところに霧吹きで水をかけていった。その水を乾いた布に吸い込ませることで、カーペットに含まれた洗剤を洗い流すのである。

汚れが綺麗に取れたことを確認しながら、初めての実践には上出来だと胸を撫で下ろした。

あとはカーペット以外の床に飛んでいるコーヒートをモップで水拭きすれば清掃完了だ。私はワゴンに立てかけていたモップを手立に立ち上がる。だが――

「あ、れ……」

体を起こした瞬間、目の前が真っ暗になった。モップを支えにして必死に足を踏ん張るが、斜めに傾いた体は床に向かって倒れていく。そんな私の背中に、力強い手が添えられた。

「……おい。大丈夫か」

驚いたような声がすぐ近くから聞こえる。気がつくとは私は、すぐ側にいた男性に体を支えられていた。目の前にある綺麗な顔に驚き、私は慌てて彼から離れた。

「も、申し訳ありません……」

ガシャーン!!

直後、私の耳になにかが割れるけたたましい音が飛び込んできた。

……え、なに、今の音。

男性と顔を見合わせ、揃って音のした方に目を向ける。次の瞬間、私は言葉を失う。

壁のニツチに飾られていた美しい壺が、床の上で無残な姿となっていた。そのすぐ横には、直前まで持っていたはずのモップが転がっている。

「ああああああっ!!」

私は、立ちくらみをおこしたのが嘘のような素早さで、割れた壺のもとへ駆け寄った。

――どうしよう、どうしよう!! 私……とんでもないことをしてしまつた!!

「あ……君の手から離れたモップの柄が壺にヒットして、そのまま床に落ちて割れた、といったところか」

割れた壺を見つめ呆然とする私の後ろで、男性が冷静に状況を分析した。私は真っ青になって振り返ると、その場で土下座した。

「もっ……申し訳ございません!! なんとお詫びをしたらいいか……っ!」

床に頭をつける私のすぐ先にある黒い革靴。その革靴が、コツコツと音を立てて私の側を通り過ぎていく。

「修復は可能だろうか……？」

彼の淡々とした声からは、怒っているのか悲しんでいるのか分からない。だけど今、私がすべきことは分かっている。

「本当に申し訳ありません！ あの、弁償させてください」

私の申し出に男性はこちらを向き、切れ長の目を少しだけ見開いた。

「君が弁償？ 払えるのか？ おそらく君が思っているよりも高額だぞ」

「……じゅ、十万……とか？」

「ははっ。五百万だ」

片腹痛い、とばかりに笑い飛ばされ、私の目の前は真っ暗になる。同時に自分のしかしたことの大きさに、サーッと音を立てて血の気が引いていった。

——ご、五百万……!? そんな大金、今の私には逆立ちしたって払えない……!!

「あの……大変申し上げにくいのですが、今の私にはその金額を払えるだけの預貯金がありません。ですが、時間はかかっても、必ず全額弁償いたしますので、どうか……」

とんでもないことをしてしまった……! これでもしこの仕事まで失うことになった

ら、私本当にどうしたらいいのか……

私は小さく震えながら、ずっとこちらを見ている男性に申し出る。

「君は随分若く見えるが、いくつなんだ？」

途中で話を遮り、男性が私に尋ねる。

「は……二十歳です」

正直に答えると、男性は驚いた様子で形のいい口をあんど開けた。

「フリーターか？」

「いえ、昼間は別の会社に勤務していて、清掃の仕事はバイトです」

すると男性が怪訝けげんそうな顔をする。

「君のような若い女性がこんな時間まで？ 親はなにも言わないのか？」

「両親はすでに他界しています。それで、あの……じ、実は今朝、勤めていた会社が倒産してしまって、給料の入る望みもなさそうなんです。だから、このバイトがなくなる
と、私、本当に生活できなくなってしまうんです」

私の話を聞いて、男性の表情はさらに険しくなる。

——そうだよね……怪しまれるのも当然だ……

天涯孤独の上に会社が倒産なんて、借金を逃れる作り話にしたってひどすぎる。我がことながら、作り話だったらどんなに良かったか……

でも本当のことである以上、どうにかして信じてもらわないと……!!

私は真剣な表情で男性に訴えかける。

「倒産した？ では君は今無職なのか」

「はい……なので次の仕事が決まるまで、支払いを待っていただけないでしょうか？
 どれだけかかっても、必ずお支払いしますので……！」

もう一度深く頭を下げて懇願する。しかし、男性は黙ったままだ。

おずおずと体を起こして目の前の彼の表情を窺うと、眉根を寄せなにか考え込んで
 いる。

こっちの事情で支払いを待ってもらおうなんて、やっぱり都合がよすぎるかな……

そこで男性が、おもむろに口を開いた。

「つかぬことを聞くが、君は今、一人で生活しているのか？ 兄弟や親類は？」

「兄弟も頼れる親類縁者もおりませんので、一人です……けど」

も、もしかして、私が無理なら他の人に弁償させようとか考えてる!?

じっと考え込む男性を見つめながら、私はこれからどうなるのだろうと不安になった。
 役員室でこんな大きなミスをしたことが会社にバレたら、即座にクビ確定だ。……そ
 うなったら、もう風俗で働くしか道は残っていないかも……

考えれば考える程、気持ち沈んでいく。

その時、ずっと黙り込んでいた男性が、確認するように聞いてきた。

「君は求職中で、一人暮らし。他に頼れる相手もないんだな？」

男性の鋭い視線が、上から私に突き刺さる。

「……はい」

「ちよつと君、立ってその場でぐるりと回ってくれないか」

なんの脈絡もない注文に、私はポカンとする。

「え？ ま、まわ……？」

「回って」

ええ……この人、いきなりなんなの？

戸惑いながらも、私は立ち上がって彼の指示通りその場でぐるりと回った。

男性は口元に手を当てながら、そんな私をじっと見つめて、数回小さく頷く。

「……箕さん、だったね？ 事と次第によっては壺の弁済を免除してもいい」

男性が口元に笑みを浮かべて、私に言った。

「えっ!! ほっ、本当ですか!?!」

さっきまで失意のどん底にいた私は、思いがけない彼の言葉に思わず食いついた。

「本当だ。だが、一つ条件がある。君にある仕事を頼みたい」

仕事、と言われた瞬間、私の胸に不安がよぎる。もしかして、なにか怪しい仕事だろ

うか？ それともまさか、風俗に売りとばされたり……
 青くなって後退る私を見て、男性がフツと鼻で笑った。
 「なにかとんでもない仕事を想像しているようだが、そういったことではない」
 しまった、考えていることが全部顔に出ていたみたい。
 気まずくて男性から目を逸らす。

「身の安全は保証する。安心していい」

その言葉に、ほっと胸を撫で下ろす。

——よ、よかった……！ 世の中、ただより怖いものはないからね。

働いて返せるなら、どんな仕事でも精一杯やらせていただく！

私は彼の提案に頷いた。

「私にできることなら、ぜひやらせてください!!」

私が承諾すると、男性の笑みが深まった。彼はスツと手を差し出し、ソファアに座るように促してくる。

「し、失礼いたします……」

私が恐る恐るソファアに腰を下ろすと、彼は私の向かい側のソファアに座った。

「さて、自己紹介がまだだったな。俺は神野征一郎せいいちろうという。年齢は二十九。この会社の常務取締役をしている」

——え？ 今この人、神野って言った？

目の前の男性を見つめたまま、ごくりと息を呑んだ。

私がいるこのビルは、神野ホールディングス本社ほんである。

「あ、あの、もしやあなた様は……」

おずおずと尋ねる私に、神野と名乗った男性はなんでもないのであるように頷いた。

「ああ……神野ホールディングスの社長は父だ。将来的には俺が神野のトップに立つ予定だ。あくまでも予定、だが」

「えっ、えええええ!!」

あまりに驚きすぎて、私は座っていたソファアから落ちそうになった。

「そんなに驚くことか？」

「お、驚きますよ!! そんな方の部屋で、私、なんて粗相を……。あ、穴があったら埋まりたい!」

思わず、両手で顔を覆い項垂れる。しかしそんな私に構うことなく、目の前の神野氏は冷静に話を続けた。

「まあ、穴に入るのはちょっと待て。君に頼みたいのは、俺の家での住み込みの仕事だ。条件としては、家賃不要で、三食付き。給料も払うし、働きによっては賞与も出そう」

神野氏の提案してきた内容に、私は口を開けたままポカーンと彼を見つめてしまう。

はつきり言って、今の私に、これ以上の仕事は存在しないのではないか。それくらい破格の条件だった。

「ほ、本当に……その条件で雇ってくださるんですか……？」
嘘ではないだろうか。もしくはなにか裏があるのではないか……と、つい疑ってしまふ。

疑り深い私の反応に苦笑しながら、神野氏は大きくゆっくり頷いた。

「本当だ。なんなら、この壺の件も君の上司には報告しないでおう」

その言葉を聞いた瞬間、私の中から迷いが消えた。

「やりますっ、ぜひ働かせてください!!」

勢いよく返事をし、神野氏に向かって深々と頭を下げた。そうしてから顔を上げると、彼は私に向かって満足そうに微笑んだ。

「では早速、君に頼みたい仕事内容だが……」

「はいっ」

住み込みでする仕事って、ハウスキーピングとかだろうか？

そんなことを考えながら、私は新たな仕事に胸を躍らせる。

この時の私は、さっきまでのどん底から一気に仕事も住居も決まり、少し浮き立っていたのだと思う。

自然と返事の声が大きくなった私に、神野氏はふっと表情を緩ませた。

「その前に、少しだけ個人的な話をさせてもらおう。俺はこの会社の跡取りとして決められた人生を歩んできたわけだが、割合に自由を許されてきた。結婚に関してもなにも言われなかったから、俺としてはまだ先でいいだろうと考えていたんだ」

「はあ」

それと仕事内容になんの関係があるのだろうか？

彼がなにを言おうとしているのか分からなくて、頭が混乱してくる。

「それが一年程前、両親……というより母が、突然結婚はまだかと言ってきたんだ。仕事が忙しくて適当に流していたら、最近、思わぬ方向へ状況が変化してしまっただね」
「ちなみに、ど、どんな方向へ……？」

なにも返さないのは失礼かと思ひ、控えめに問いかける。

すると神野氏は、ハア、と深くため息をついた。

「先日、三十までに結婚相手を見つけられなければ、こちらで相手を決めると言ってきた。交際相手ならまだしも結婚相手だぞ。しかも母が選ぶ女性なんて、付き合っている良家の令嬢の誰かに決まっている。そんな相手、会ったら最後、どんなに性格が合わなくても断れないだろう」

あ……なるほど。つまり、個人の問題ではなく、家同士の問題になっちゃうんだな。

神野氏の立場的に、断つたらいろいろ弊害が生じるのだろう。

御曹司も大変なんだ……

「それは……その、大変ですね。……あれ、でも神野さん今二十九歳って仰つてましたよね？ 三十まで、もう時間がないのでは……」

神野氏がまっすぐ私を見て頷いた。

「その通りだ。親の決めた女性との結婚を回避するためには、なんとしても二週間後の誕生日までに結婚相手を見つけなければならぬ」

「に、二週間後!？」

「そうだ」

窓の外に視線を向け、神野氏は片手で頭を押さえる。そんな彼を見ながら、私は首を傾げた。

「あの、こんなに大きな会社だったら、社内にも結婚相手として相応しい素敵な女性がたくさんいると思うのですが……」

しかもこんなイケメンなら、みんな喜んで結婚相手として立候補するんじゃないかな？ なんて思つてしまふ。

しかし神野氏は、ため息をついて小さく頭を振った。

「俺は自社の社員とは恋愛しないことにしている。なにかあつた時面倒だからな。しか

し、ここに来て、それも言っていられなくなった。こうなつたら信頼できる人間に協力してもらおうかと考え始めていたところだったんだが……」

そう言つて神野氏が私をじつと見つめてくる。その瞬間、ふと頭に浮かんだ可能性に、私は顔を引き攣らせた。

「ま、まさか……」

「君に、俺の婚約者の振りをしてもらいたい。設定として、俺たちはすでに同棲していて、他人の入り込む余地はないとする」

言い終えると、神野氏はニヤツと不敵に笑う。

「無理です!!」

即座に断ると、神野氏は不機嫌そうに眉根を寄せた。

「なぜだ。さっきは喜んで条件を呑むと言つただろう?」

「だ、だって、まさか仕事が婚約者の振りをすることだなんて思つてもみませんでしたから! なんてこんな、会つたばかりの私に、そんな重要なこと……」

「家族がおらず一人暮らし、会社が倒産して現在求職中。君の話聞いていてピンときた。今の君なら、金のためと割り切つてこの仕事を引き受けるのではないかと。それに……」

「それに……?」

神野氏は私を見てフツ、と鼻で笑う。

「君の顔が俺の好みだった」

「は……か、顔？」

こんなイケメンに「顔が好みだ」なんて言われたら、普通なら照れて顔を赤らめるところだろう。だけど、今の私にそんな余裕は無かった。

小刻みに震える両手をギュッと握り、小さく頭を振った。

「そんなこと言われても……む、無理です。たとえ振りだとしても、婚約者だなんて……」

「では、この壺の弁済免除の話は無かったことになるが……もちろん君の上司にも、このことはしっかり報告させていただく」

目に見えないタイライが、私の頭の上にガンツ、と落ちてきた気がした。

そうだった……！

彼に対して負い目のある私は、神野氏を見つめたままにも言えなくなってしまう。

困り果てた私をちらりと見たあと、彼は姿勢を変えてソファーに浅く腰掛ける。

「……なにも本当に結婚するわけじゃない。あくまでも契約として婚約者の振りをしてもらうだけだ。君の状況を考えたら……決して悪い話ではあるまい。どうだろう、ここは俺と手を組まないか？」

「手を、組む……？」

途方に暮れた顔で神野氏を見上げると、力強く頷かれた。

「そうだ。互いに協力してそれぞれの問題を解決するんだ。さしあたって俺は、君に住むところと十分な給料を提供しよう。壺の弁済も無しだ。その分君は、俺の婚約者として振る舞い、母の決めた望まぬ相手との結婚を回避させてくれ」

そう言われて、私はもう一度冷静になって考えてみる。確かに、彼の提案は私にとってこれ以上ない好条件。この話を断った時のリスクを考えれば、おのずと選ぶ道は決まってくる。

だって、断ればミスを上司に報告されて、バイトはクビ。しかも、五百万の借金つきだ。そうなれば、当然家賃は払えなくなり路頭に迷うしかない。その状況で求職活動と借金返済なんて、どう考えたって無理だ！

問題は、自分に大企業の御曹司である彼の婚約者が、たとえ振りでもできるのか、という点。

まったくもって自信はない。

だけど、今の私には、この条件を呑む以外の道は残されていなかった。私はちらりと神野氏を見る。彼は涼しい顔で私の返事を待っている。

——生きていくためには、割り切るしかない……

そうだ、割り切れ、私！今は現状を打破するために彼の話を受けるしかない！
覚悟を決めた私は、改めて神野氏を見つめて、しっかりと頷いた。
「わ、分かりました。私でいいのなら……そのお話、引き受けます」
私の返事を聞いた神野氏の口の端が、クッと上がった。

「よし。交渉成立だ。寛さん……君、下の名前は」

神野氏が立ち上がり、私の方へ歩いてくる。

「沙彩、です」

「では……沙彩。以後よろしく」

目の前で足を止めた神野氏が、私に向かって手を差し伸べた。大きくて、指が長く骨ばっている大人の男の手。

本当にこの手を取っていいものかと、一瞬、躊躇ちゆうちゆうした。だけど。

——これは、契約だ！そう、お仕事なのだ！

そう自分を納得させて、私は目の前の手にゆっくりと自分の手を重ねたのだった。

第二章 私は何にをすればいいのでしょうか、ご主人様

バイトを終えた私は高級外車に乗せられ、現在自分のアパートに向かっている。なぜこんなことになっているのかというと——

『ビルの出入り口に車を回しておく。今日中に荷物を纏まとめてうちに来い』

『は!? 今日中、ですか!?』

握手を交わして契約を結んだ私に、大企業の御曹司らしく神野征一郎氏が当然のように命じた。

『口約束とはいえ契約した以上、君には今すぐ俺の婚約者として必要な知識を身につけてもらう必要がある』

『はあ……』

私が洪々頷くと、神野氏——改め神野さんは胸ポケットからスマートフォンを取り出し、誰かに電話をかけた。

『俺だ。今すぐ常務室に来るように』

そうしてやって来たのが、今この車を運転している井筒いづつさんという男性。彼は、神野

さんの秘書なのだそう。今回の婚約者の振りをする件も、神野さんが説明をしていた。長身の神野さんとあまり変わらない身長に、少しキツめの顔立ち。そこにメタルフレームの眼鏡なんてかけているから、威圧感が半端ない。

私のアパートまで彼と二人で行くことになったのだけど、この人、車が走り出してから一言も喋らないのだ。

時刻は夜の十時過ぎ。もしかしたら、こんな遅くに時間外労働をさせられて怒っているんだろうか。

後部座席で一人ビクビク考えを巡らせていると、不意に「寛さん」と声を掛けられた。

「はっ、はい！」

慌てて運転席の井筒さんに視線を向ける。

「あなたは神野征一郎という人間を、どこまでご存じですか」

「……恥ずかしながら、まったく知りません……」

自分がバイトをしているビルの経営一族のことくらい、知っておくべきだった。いや、でもこんな状況になるなんて誰が予想できただろう……

「では、簡単にご説明いたします。神野征一郎、二十九歳。きょうだいはいません。現在は、神野ホールディングスの常務取締役執行役員であり、将来は神野グループのトップに立つことが約束されています。見ての通り、大変見目がよいので『経済界のプリン

ス』と言われ、なにかと注目を浴びることも多いのです」

「プリンス……そ、そんな方の婚約者役が、私みたいに貧乏で、なんの取り柄もない人間に務まるのでしょうか……」

改めて、自分ほとんどないことを引き受けてしまったのではないか、という気がしてならない。今更だけど。

「務まるかどうかではなく、やっていただかないと困ります。やるとなったら徹底的に、というのが神野の流儀。周囲にニセモノだとバレないように、完璧な婚約者を演じるのがあなたの役目です」

井筒さんにそう言われて、私は神野さんの言葉を思い出し青ざめた。

——そうだよね……ただ婚約者の振りをするだけで、あんな破格の条件出したりしないよね……一体私はなにをやらされるのだろう……？

考え始めたらどんどん不安になってきた。あの条件に見合った要求って、私にどうにかできることなのだろうか。

「あなたには努力していただきますが、もちろんこちらでもフォローいたします。そんなに不安そうな顔をせずとも大丈夫です」

そんなに顔に出していたのかと、恥ずかしくなるが、井筒さんの言葉にちよつとほっとした。

「あ、ありがとうございます……よろしくお願います」

後部座席で頭を下げる私に向かって、井筒さんはそれよりも、と別の話をし始める。

「先程、清掃会社に登録してあるあなたの個人情報を見ました」

「はやっ」

「ご両親は他界され、ごきょうだいはいらっしやらない。親類縁者など親しい付き合いのある方はいらっしやいますか」

両親が若い頃は、それなりに付き合いがあったらしい。だけど、父が友人の借金の連帯保証人になったことで、様々なことが変わってしまった。その友人が、負債を残したまま夜逃げしてしまい、父がその借金を背負うことになったのだ。それを知った親類は、皆、あっさり離れて行ってしまった。

「子供の頃に会って以来、疎遠になっています。今はまったく付き合いはありません」

「結構。では公の場でもし出自を尋ねられたら、井筒の遠縁、と仰ってください」

「……いいんですか？ そんなこと言ってしまうって」

「井筒家は代々神野家に仕えてきた一族です。今日の井筒家があるのは神野家のお陰。

ゆえに井筒家の人間は神野のためなら全力で偽装に協力します。ご安心ください」

「わ、分かりました」

全力で偽装に協力するなんて、どんな一族なんだ……いや、違う。なんだかどんどん

話の規模が大きくなっている気がするんだけど、本当に大丈夫なんだろうか。

やっぱり私、判断を誤ってしまった気がして仕方がない。

そうこうしているうちに、井筒さんの運転する車が、私のアパートの前に横付けされた。

「こちらですか？」

井筒さんが訝しげにアパートを見つめる。どうせボロいアパートだと思われているのだろう。

「はい。じゃあ、行つてきます」

私は車を降り、アパートの自室に向かおうとする。

「五分」

車のドアを閉めようとした時、井筒さんが私を見てそう言った。なんのことか分からず、私は思わず聞き返す。

「はい？ 五分？」

「貴重品と必要最低限の荷物だけお持ちください。時間は五分もあれば充分でしょう。では、行ってらっしゃいませ」

「え、ちよっと、五分は短すぎじゃ……」

井筒さんは慌てる私から視線を外し、腕時計を見る。

「三十秒経過」

「……っ、い、行ってきますっ……!」

だめだ。この人、融通がきかない!

車のドアを閉めた私は、猛ダッシュで自分の部屋に荷物を取りに行った。

——五分後——

持っている中で一番大きいボストンバッグに必要な最低限の荷物を詰めて、私は井筒さんの待つ車へ戻った。

「時間びつたりですね」

「あなたがそうしろって言ったからじゃないですか……!」

ぜえぜえと息を乱しながら、表情を変えない運転席の井筒さんに食ってかかった。さすがに五分は厳しかったが、元々荷物が少ないので、意外と間に合ってしまったのがちょっと悔しい。

後部座席に乗り込んだ私を確認して、井筒さんは車を発進させる。

「言い忘れましたが、清掃会社のアルバイトは本日付でお辞めください。それと、このアパートも解約してください。よろしければこちらで手続きをいたしますが、どうなしますか?」

「えっ!? ど、どうしてですか!? バイトはともかく、アパートを解約したら、帰ると

ころが無くなってしまいます」

焦って後部座席から身を乗り出す私を一瞥し、井筒さんは再び視線を前に戻した。

「神野からちらっと聞きましたが、あなたは今月の家賃が払えない程困窮しているそうですね」

「うっ……」

痛いところを突かれ、私は身を縮める。

「それに今見たところ、あのアパートは防犯対策がなにもされていないし、周辺の治安もよくありません。とても、二十歳の独身女性が一人暮らしをするのに適した環境とはいえない。部屋を借りる時、仲介業者からそういった説明はありませんでしたか」

やや咎めるような口調で尋ねられ、私は戸惑いつつ口を開いた。

「い、いえ……条件を伝えたら、提示された物件があのアパートだったんです」

「足元を見られましたね。家賃も適正価格か怪しいものです。とりあえず、家具や家電は後程業者に運ばせるとして、解約してもよろしいですね?」

「はい……」

静かながら反論を許さない言葉に、私は頷くことしかできなかった。

あれよあれよと決められていく状況に頭が追い付いていかない。

「え、えと……井筒さん。このこと、神野さんは承知してるんですか?」

「もちろん。全て神野の指示です」

この仕事を引き受けたのは私だけけど、本当にこのまま神野さんの言う通りにして大丈夫なんだろうか。やっぱり、いきなり同居するのはマズいような気がしてきた。どうしよう、私、目先の利益につられて早まったかもしれない。

全身からサーッと血の気が引いて、背中を嫌な汗が伝う。

今ならまだ間に合うかも、と私は運転席にいる井筒さんに声を掛けた。

「あ、あの……井筒さん、私やっぱり……」

「そろそろ神野邸に到着いたします」

同居は考え直してほしい、という私の言葉は、同じタイミングで言葉を発した井筒さんによってあっけなく遮おさえられてしまう。

諦めの境地で前を向くと、白い門扉が私の視界に入った。

井筒さんが車の速度を落としながらなにか操作をすると、門扉がゆつくりと開き始める。

「ここが神野邸です」

門扉もんびを通り抜けた車は敷地内を進み、目の前に白亜はくあの邸宅が迫ってきた。

……でかい。とにかくでかい。昔、両親と一緒に住んでいた建坪三十坪くらいの家が、優に三軒は入りそうな広さがある。

呆気にとられたまま豪邸を眺めていたら、車が邸宅の玄関前に横付けされた。

「車を置いてきますので、ここでお待ちいただけますか」

井筒さんに言われるまま、車を降りる。玄関には『JINNŌ』と記された表札かかが掲げられていた。間違はなく神野さんの家なんだ、ここ。

すぐに戻って来た井筒さんのあとに続き、私はこれから住むことになる神野邸に足を踏み入れた。

「……す、ごい」

玄関入って目に飛び込んできたのは、大きな吹き抜けと天井からぶら下がるシャンデリア。こんな風景はテレビや漫画の中でしかお目にかかったことがない。

「靴はシューズクロゼットの空いているスペースを使用してください」

「しゅ、しゅーずくろーぜつと……？ あの、靴は今履いているスニーカーと冠婚葬祭用の黒いパンプスしか持っていませんが……」

「……では、中をご案内します」

華麗にスルーされてしまった。

私はため息をついて、脱いだ靴をシューズクロゼットに仕舞うと、井筒さんのあとに続いた。

「広い家ですね……ここには何人くらいの方が住んでいらっしゃるんですか？」

「住んでいるのは神野と私だけです」

「えっ、二人だけ!? も、もつたいない……」
なんとこの贅沢な!

「元々は神野のご両親も一緒にお住まいでしたが、温泉付きの別荘に引っ越されましたので。さ、こちらがキツチン・ダイニング・リビングになります。基本的に食事などはこちらでしていただくこととなります」

井筒さんがリビングのドアを開ける。そこには、神野さんの姿があった。
リビングの中央に置かれた黒のレザーソファから立ち上がった彼は、帰ったばかりなのかジャケットを脱いだだけのスーツ姿だ。

「あの、今日からお世話になります。よろしくお願ひいたします」
とりあえず、とばかりに私は神野さんに深々と頭を下げる。

「ああ。ところで、荷物はそれで全部か」

頭を上げた私に、神野さんは怪訝けげんそうに問い掛けてきた。家具や家電は後程運んでもらうにしても、ボストンバッグ一つ、という荷物少なさに驚いたようだった。

「はい。一人暮らしを始めた時に大分処分したので」

「服や化粧品を買ったりはしないのか?」

「あまり買いません」

私の返答に、神野さんは腕を組んで眉根を寄せる。

「物を買わないのに貯金がないって、一体なにに使ったんだ?」

「お墓です」

その答えはさすがに神野さんも予想していなかったようで、私を見たまま目を見開いた。

「墓?」

「はい……うちには両親を入れるお墓が無くて。気分的なものですが、やっぱり命日やお彼岸ひがんとかにはお墓参りして手を合わせたいと思ったので」

神野さんも井筒さんも、黙って私の話を聞いてくれている。話し終えた私に、まず井筒さんが口を開いた。

「昨今は若い人の墓離れが問題視されていますが、あなたのような考えを持った方がいるとは。私はご立派だと思いますよ」

ウンウンと井筒さんに肯定してもらって、ちょっとだけ嬉しかった。しかし神野さんの考えは違ったようだ。彼はソファに腰掛け、呆れたようにため息をつく。

「購入はもう少し考えるべきだったな。結果的に生活が苦しくなっては本末転倒だ」

彼の言うことはもつともだ。だけど、この状況は私だって想定外だったのだ。まさか勤め先が倒産するなんて思ってもみなかったのだから。

私が黙り込んでいると、神野さんがソファーからおもむろに立ち上がる。「説明することは山程あるが、ひとまず今日は休んでいい。仕事の詳細は明日の朝、改めて話す」

「分かりました……で、私はどこで休めばいいのでしょうか……?」

すると神野さんと井筒さんが顔を見合わせた。その後、神野さんがニヤリと笑って私を見る。

「仮とは言え俺の婚約者だ。君さえよければ俺のベッドで一緒に寝てもらって構わないが?」

色気を感じる切れ長の目にドキッと鼓動が跳ねた。これまでの人生で恋愛経験が皆無の私は、どう返事をしていいの分からぬ。

「そっ……それはちよつと……できれば、ご遠慮申し上げたいのですが……」

しどろもどろになって断ると、神野さんがフン、と鼻で笑う。

「俺の誘いを断るとは失礼な奴だな」

私に冷たい視線を送った神野さんは、井筒さんになにか目くばせをしてリビングから出て行った。

神野氏は、ただそこにいるだけで妙な存在感がある。大企業の御曹司ゆえなのか、一般人とは違うなにかオーラのようなものが出ている気がした。

それもあり、彼がリビングからいなくなったことで緊張の糸が緩み、私の肩から一氣に力が抜けた。

「では寛さん、客間にご案内します。この家にいる間はそこを自分の部屋として使ってください」

「わ、分かりました」

よかった、自分の部屋をもらえるんだ。それを知って私は心から安堵する。

そうして私は、客間だという十畳はありそうな部屋へ井筒さんに案内された。部屋の中にはセミダブルのベッドにクローゼット、立派なドレッサーまで備わっていた。はっきり言って、住んでいたアパートより広いし、私の部屋になかったものが揃っている。

「凄く素敵な部屋ですね……!」

「この家にはバスルームが一階と二階に一つずつあります。そちらはいつ使っていただけでも構いませんので。他になにかありましたら、私の部屋は一階のリビングの隣です。いつでも声を掛けてください」

「分かりました。あの、井筒さん、今日はいろいろとありがとうございました。これからよろしくお願いたします」

忘れないうちに、私は井筒さんに勢いよく頭を下げた。

井筒さんは、小さく息を吐いたあと「本日はお疲れさまでした。今夜はゆっくりお休

みください」と言って部屋を出て行く。

井筒さんの足音が聞こえなくなり、気が抜けた私はふらふらとベッドに倒れ込んだ。「なんて一日だ……」

勤めていた工場が倒産して、バイト先で大きなミスをやらかした。そのせいで普段なら決して関わることもない御曹司に婚約者の振りを頼まれて、こんな豪邸に住むことになるなんて。

——お父さん、お母さん。私はとんでもない人たちと縁を結んでしまったようです……

横になると、どっと疲れが押し寄せてくる。同時に眠気にも襲われて、私は着替えもせず、ベッドの上で眠ってしまった。

翌朝。私はふかふかの布団に違和感を覚えてハッと目を覚ました。そして視界に飛び込んできたのは、いつもの茶色い木の天井ではなく、綺麗なシャンデリアがぶら下がった白い天井だった。

「……あ、そうだった……」

思い出した。壺の弁償を免除してもらおう代わりに、住み込みで神野さんの婚約者の振りをすることになったんだ。

時計を見たら、朝の五時前。昨夜は眠気が我慢できなくて、ベッドに倒れ込んだまま眠ってしまったらしい。

動き出すにはまだ早いけど、さすがにシャワーを浴びてすっきりしたい。そう思った私は、昨夜井筒さんが言っていたことを思い出し、二階のバスルームを借りることにした。

着替えを持ってそーっと部屋を出る。時間も早いし、神野さんたちはまだぐっすり寝ているだろう。物音一つしない廊下を歩き、バスルームと書かれたドアを発見。なるべく音を立てないよう慎重にドアを開け中に入る。そして私は、感動で目を見張った。

「おおお……」

シャワーブースは透明なガラスで周囲を仕切られていて、その向こうにあるバスタブは大人二人が余裕で浸かれるくらい大きい。これまで私が使っていた、膝を抱えて入るのが精一杯のバスタブとは大違いだ。

——す、すっごおおお。さすがお金持ち……!!!

立派なバスルームに興奮しながら服を脱ぎ、ガラス張りのシャワーブースに入った。………というか、シャワーブースなんて生まれて初めてだ。

中には、高級そうなボディソープや、シャンプー、リンスなんかも揃っている。ありがたく使わせてもらって、髪と体を洗った。泡を落としながら、温かいシャワーを浴

びる。

——は……………

ほんやりとお湯に打たれながら至福の時を過ごしていると、背後でカタンと音がした。
「ん？ なに……………」

音に反応して何気なく振り返ると、浴室の壁に手をつきこちらを見ている神野さんがいた。

「えっ、え……………キャ——ッ！！」

私の悲鳴が浴室内に反響する。

なんでこんなところに神野さんが？ っていうか、私今、裸……………！

耳をつんざく大声に神野さんは、うるさそうに顔をしかめた。

「朝っぱらから、うるさいぞ」

「なっ、うるさいじゃないですよっ！！ なんで中に入ってきて来てるんですか！ 出ていってくださいますっ！！」

私は慌てて彼に背を向け、胸を両手で隠す。それなのに神野さんは、全然出て行こうとしない。それどころか私の体をじろじろと眺めてくる。

「昨日倒れたお前を受け止めた時もあったが、ちよつと細すぎやしないか。ちゃんと三食べてるのか？」

「ちゃんと食べてますっ！ って、そんなことはいいから、早く出ていってくださいますっ！！」

全身に神野さんの視線を感じて、あまりの羞恥しゆうちに体が熱くなっていく。きつと顔は真っ赤になっていることだろう。

「俺としてはもう少し腰の辺りに肉がある方が好みだが……………でも意外と胸と尻にはいい感じに肉がついていて、悪くない」

じっくり裸を見られたどころか、感想まで聞かされて恥ずかしさに死にそうだ。

「……………っ！」

——もう、無理……………！！

痺しびれを切らした私は、勢いよく振り返りシャワーブースを出る。その行動に、神野さんは驚いたように目を見開いた。

「おっ」

「もう、いいから出てって——っ！！」

私は、浴室の壁に寄りかかっていた彼を外に押し出しドアを閉めた。

「し、信じられない……………！！」

人がシャワーを浴びているところに、平然と入ってくるなんて。

そんな人の婚約者の振りをするなんて、はたして大丈夫だろうか。今後の生活がたま

らなく不安になり、私は裸のまま頭を抱えてしゃがみこんだ……

なんとか気持ちを立て直してリビングに行くと、パリッとスーツを着た井筒さんが私に声を掛けてくる。

「おはようございます。よく眠れましたか」

「おはようございます。井筒さん。おかげ様で、眠れまし……」

そこまで言った時、スーツ姿の神野さんが、ダイニングテーブルで新聞を読みながらコーヒーを飲んでいるのに気づいた。

その瞬間、思わず私の口元がムッと歪ゆがんでしまう。

「それはよかった。私たちは朝はコーヒーだけです、あなたはどうしますか？ と言っても飲み物くらいしかありませんが」

言われてテーブルの上を見ると、本当にコーヒーの入ったカップしかない。

「お二人とも、食事を取らなくても大丈夫なんですか？」

「もちろん腹が減ったら食うさ。外食か、デリバリーで」

神野さんがなんでもないことのように言う。それを聞いて、『金持ちめ……』と心の中で悪態をついてしまった。

「ではお言葉に甘えて飲み物をいただきます……冷蔵庫の中を見てもよろしいですか？」

「いいですよ」

井筒さんの同意を得て、私はキッチンの奥に鎮座する大きな冷蔵庫を開けた。

「……ほんとだ」

がらんとした冷蔵庫の中には、ミネラルウォーターのペットボトルや、外国の瓶ビールなど……本当に飲み物しか入っていないなかった。

——こんなに大きな冷蔵庫なのに、なんでもつたない……

がっかりしつつ、私は炭酸入りの水を一本取り出す。そのタイミングで、神野さんが読んでいた新聞をばさ、と音を立ててテーブルに置いた。

「沙彩、こちらに座れ。仕事について説明する」

促うながされるまま、私は彼らの向かいの席に腰を下ろした。私が座るのを待っていた神野さんが、再び口を開く。

「昨日も言った通り、君には俺の婚約者の振りをしてもらおう。そこでまずは、俺の母に気に入られるような女性を演じてほしい」

「……神野さんのお母様に、ですか」

「そうだ。俺を結婚させたがっている張本人だ。母は自分が姑しゅうごで苦勞したから、俺の結婚相手は自分と気の合う女性がいいと言っけかないんだ。まだ結婚する気のない俺に代わって、自分が相手を見つけると意気込んでいるくらいだしな」

なるほど、と神野さんの言葉に小さく頷く。
 だけど、私なんか、神野さんのお母様が気に入る婚約者を演じられるのだろうか？
 はつきり言ってまったく自信が無い！

「やっぱり、無理じゃないですか？ とても私にできるとは思えません」

「なら、割った壺はどうするんだ」

「あうう……」

それを持ち出されるとなにも言えない。世の中お金が全てとは思っていないけど、なんだかんと言ったところでお金がなければ立場は弱くなる。それはこれまでの人生で、痛いくらい身に試みていた。

黙り込んだ私を見ながら、神野さんが言葉を続ける。

「自分で相手を見つけたのが最善だと分かっている。だが、それでなくても重要な仕事を抱えて時間がない中、婚約者候補を見つけ、のんびり愛を育んでる暇などない。だから……そうだな、一年間。君には俺の婚約者の振りをしてもらいたい」

「一年……」

初めて具体的な期間を提示されて、私は自分に言い聞かせるように、その言葉を繰り返した。

「そうだ。その間の衣食住は保証するし、給料も出す。一年後、俺の身边が落ち着いた

ところで婚約を解消し、君を自由にしよう。希望するなら、就職先や住居もこちらで紹介する。それなら安心だろう？」

不安があるとすれば、神野さんの望む婚約者を演じることができるといふことと、彼が婚約者役になにをどこまで要求するのか、ということだ。

それ以外は、お給料も出るし、こんな広い家に住むことができるので問題はない。それどころか、背負うはずだった壺の借金をチャラにしてもらえるのだからいいことづくめだ。

不安はあるけれど背に腹は代えられない。

「わ、かりました……精一杯、努めさせていただきます」

私は改めて、目の前にいる神野さんに頭を下げる。すると彼は口元に手を当て、ニヤリと不敵に笑った。

「こちらこそ、よろしく頼む。しっかりやれよ」

お金のためだ。多少のことには目を瞑り、まずは神野さんのお母様に気に入ってもらえるような、完璧な婚約者を演じてみせる！ そしてお金を貯めて、大手を振ってこの家を出て行ってやるのだ。

目の前にいる、まだ全面的には信用できない男を見ながら、私は固く心に決めた。

「ちなみに母との対面は二週間後だ。俺の誕生日パーティーに来ることになっているか

立ち読みサンプル はここまで